水星交響楽団
第58回定期演奏会

指揮　齊藤 栄一

2018.11.4 (日)
13:30 開演（13:00 開場）

すみだトリフォニーホール
大ホール

ごあいさつ

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団（略称：水響）の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

三善晃・ファリャ・サン＝サーンスと並んだプログラム。底に流れるのは「フランス」のエッセンスです。このうちフランス人はサン＝サーンスだけですが、三善はパリ国立高等音楽院に留学していましたし、ファリャの三角帽子はディアギレフ主宰のバレエ・リュスによるバレエ作品で、20世紀初頭に遊学していたフランスの印象派書法が冴える作品です。

水響では、2017年5月に、ストラヴィンスキー「火の鳥」をメインに、サティ「パラード」・ルーセル「バッカスとアリアーヌ」という、同じくフランス色の強いプログラムを取り上げましたが、またひとあじ違う「フランス」をお届け致します。

また今回は、素晴らしいソリストお二人をお招きしての演奏会となりました。ファリャのソプラノ独唱には、以前、同じくファリャの「恋は魔術師」でも歌っていただいた寺島夕紗子さんをお招きしました。スペインで研鑽を積まれたオーソリティとしてのファリャ、大変楽しみです。そして、サン＝サーンス「オルガン付き」のオルガンは、水響ではお馴染みの大木麻理さんです。今年春からミューザ川崎のホールオルガニストに就任され、最近では和太鼓とのコラボレーションなど多彩な活躍をされています。水響としても、満を持しての「オルガン付き」共演となります。

それではごゆっくりとお楽しみください。

水星交響楽団　運営委員長　植松 隆治

本日のプログラム

三善 晃　交響三章（約30分）

第1楽章　♪＝68 environ
第2楽章　Presto　♪＝180 environ
第3楽章　♩＝60 enrivon

ファリャ　バレエ「三角帽子」より（約35分）

第1幕／町外れの粉屋の水車小屋（1. 序奏～昼下がり　2. 粉屋の女房の踊り　3. 葡萄の房）
第2幕／夜、粉屋の家（4. 隣人たちの踊り　5. 粉屋の踊り～カッコウの歌　6. 代官の踊り　7. 終幕の踊り）

休　憩（20分）

サン＝サーンス　交響曲第3番 ハ短調作品78「オルガン付き」（約35分）

第1楽章（第1部）Adagio～Allegro moderato　（第2部）Poco adagio
第2楽章（第1部）Allegro moderato～Presto～Allegro moderato～Presto
（第2部）Maestoso～Allegro

PROFILE

水星交響楽団

水星交響楽団は、1984年に一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成されたアマチュア・オーケストラである。都内の主要ホール等で、定期演奏会を年2回行い、マーラー、バルトーク、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ホルストなど大編成の曲に積極的に取り組んでいる。楽団の名前の由来は、一橋大学のシンボルである「マーキュリー」やセロ弾きのゴーシュの「金星音楽団」から来ている等いろいろ考えられる。

指 揮
齊藤 栄一

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。82年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」(関西初演) の副指揮者を務める。

84年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ「カルミナ・ブラーナ」(95年、東京文化会館)、「ダフニスとクロエ」(99年、新宿文化センター) を指揮した。その後、「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005年には、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」3部作 (4台のピアノと打楽器) を指揮している。

明治学院大学文学部芸術学科教授。著書に「往還する視線 14-17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」(近代文芸社)、「振っても書いてもしょせん酔狂」(水響興満新報社) がある。

ソプラノ
寺島 夕紗子

東京藝術大学及び同大学院修了。文化庁在外研修員としてスペインで研鑽を積む。

第23回フランス音楽コンクール第1位。第8回日仏声楽コンクール第2位他。

全国で好評を博しているトークコンサートのほか、NHKテレビ「そして歌は誕生した」、NHKラジオ「名曲リサイタル」「わくわくラジオ」「いのちの対話」はじめ、日本全国のテレビ、ラジオ番組に出演。「第九」「メサイヤ」などのオーケストラ作品のソリストも多数務め、海外でもイギリスにはたびたび招かれて演奏。

スペインでのリサイタル開催はドキュメントとしてテレマドリッドで放映され話題をよび、同時にラジオやテレビコマーシャルにも出演している。2015 年より毎年、在マレーシア日本大使館の招きにより大使公邸等でリサイタルを開催。

父・寺島尚彦作「さとうきび畑」「緑陰」等3枚のCDをリリース。

また書籍出版、新聞のコラム連載や雑誌への執筆活動も展開中。

洗足学園音楽大学講師。

オルガン
大木 麻理

東京藝術大学卒業、同大学院修士課程修了。

DAAD (ドイツ学術交流会)、ポセール財団の奨学金を得てドイツ・リューベック国立音楽大学、デトモルト音楽大学に留学し、満場一致の最優等で国家演奏家資格を得て卒業。

第13回「静岡の名手たち」、大学院アカンサス音楽賞受賞。第3回ブクステフーデ国際オルガンコンクール優勝、マインツ国際オルガンコンクール第2位、第65回「プラハの春」国際音楽コンクールオルガン部門第3位、併せてチェコ音楽財団特別賞受賞。

2016年、ミューザ川崎シンフォニーホール主催「オルガンの未来へⅢ」の公演企画オーディションにおいて意欲的なプログラムを高く評価され、その企画が採用された。

2018年3月、デビュー CD「エリンネルング ～オルガン音楽・300年の伝統」がレコード芸術特選盤に選ばれた。

NHK「リサイタル・ノヴァ」をはじめ、TV・ラジオに出演しオルガンの普及に努めている。

現在、神戸女学院大学非常勤講師、聖グレゴリオの家講師、彩の国さいたま芸術劇場「みんなのオルガン」講師。(一社)日本オルガニスト協会、日本オルガン研究会会員。

2018年4月よりミューザ川崎シンフォニーホール・ホールオルガニストに就任。

PROGRAM NOTES 1

三善 晃　交響三章

はじめに

今回のコンサートは、様々に「3（サン）」が関わった作品3曲が並ぶプログラム。最初にお聴きいただくのは、三善晃作曲「交響三章」である。

最初に個人的なお話を。私が「交響三章」に初めて出会ったのは往年の吹奏楽の名門校、秋田南高校が1986年の全日本吹奏楽コンクールで演奏した第3楽章（編曲は天野正道）の実演だったと記憶する。衝撃的であった。当時、現代音楽にかぶれ始めていた吹奏楽少年の私はスマートでカッコいいこの曲にノックアウトされてしまい、高校の先輩からオリジナルの管弦楽版のLP（！）（現在手に入れられる唯一の音源と同一の演奏）を借りてカセットテープにダビングさせてもらい、それこそテープが伸びて音程がグニャグニャになるくらいまで聴きこんだほどである。大学に入ってオーケストラに入部してから、いつかどこかで演奏できたらという淡い希望を持ちつつオリジナルのスコアを手に入れたが、一見して分かる難易度の高さに再び衝撃を受けた。正直なところさすがにこれを実際に演奏できる機会などまずないだろうな、と半ば以上諦めていたが、今回、ありえないだろうと思っていた「機会」がめぐってきた。今は念願が叶った嬉しさと、想像していた以上の難易度の高さゆえの苦しさとが同居した、大変複雑な気分である。

と、個人的な述懐はここまでとして、以下、現代日本が生んだ稀有な才能の一人である三善晃氏と、「現代日本の古典」として後世に遺るべき名曲であるこの曲について、皆さまにご紹介させていただきたいと思う。

三善晃――その生涯と経歴

三善晃は、1953年に「クラリネット、ファゴットとピアノのためのソナタ」により毎日音楽コンクール作曲部門（室内楽）で第1位を受賞してデビュー、翌1954年の「ピアノと管弦楽のための協奏的交響曲」を皮切りに尾高賞を6回受賞（2018年時点で最多）。他、1970年代から10年余りの間に書かれた「レクイエム」、「詩篇」、「響紋」の合唱付管弦楽作品3部作、1995年から4年間にわたり連続して発表された「夏の散乱」から「焉歌、波摘み」に至る4部作等が代表作として挙げられる。これ以外に合唱曲、ピアノ曲の分野でも旺盛な創作を行い、芸術選奨文部大臣賞、サントリー音楽賞等を受賞、芸術院会員・文化功労者、フランス政府芸術文化章オフィシエ章などを受章している。また、創作活動以外では桐朋学園大学教授を経て同大学学長、東京文化会館館長等などの要職を歴任した。5年と1か月前の2013年10月4日、心不全により死去。

1933年1月10日、杉並区阿佐ヶ谷に生まれた彼は、幼少時より自由学園の幼児生活団でピアノ、ヴァイオリン、ソルフェージュなどを学ぶ。同学年に山本直純が、主な教師に童謡「とんぼのめがね」等で知られる作曲家、平井康三郎がいた。その後、ドイツ系が主流だった日本の高等音楽教育にフランス系のメソッドを持ち込んだことで知られる池内友次郎に師事、高校3年生時からはフランスから招聘されたヴァイオリン奏者にしてローマ賞受賞作曲家レイモン・ガロワ＝モンブランからも指導を受ける。当時の三善は同時代のフランス音楽に強い関心を持ち、特にアンリ・デュティユに私淑していたが、ガロワ＝モンブランがデュティユの弟弟子に当たる人物であったことが後に重要な意味を持つことになる。

大学進学を前に将来の進路について思案した結果、作曲を自らの天職と見定めたが、この時点で既に十分以上のメチエを身に付けていたこともあり、一般的な音楽大学でではなく東京大学に進学して文学部でフランス文学を専攻する。先述の毎日音楽コンクール第1位、最初の尾高賞の受賞は、東京大学在学中だった20歳前後の出来事である。

ガロワ＝モンブランの帰国を機に東大を休学、フランスの国費給費留学生としてパリに渡り、国立高等音楽院にてガロワ＝モンブラン、さらにはその師でもあったアンリ・シャランらに師事してコンセルヴァトワール式の和声法・対位法などに磨きをかける一方で、かねてより私淑していたデュティユともガロワ＝モンブランを経由して知己を得て直接的な影響を受けた。これよりやや早い時期に同じくパリに留学した黛敏郎が、「学ぶべきことは何もない」として早々に帰国してしまったのとは対照的に、三善のパリ滞在は1955年から57年まで都合3年ほどにわたったが、その間に知り合った1年年長の矢代秋雄とは1976年の矢代の死に至るまで親密な関係を保つことになる。

フランス留学中の経験は、しかし、三善に自分自身が西欧の音楽文化から根本的に隔絶していることを悟らせるという皮肉な結果をもたらした。幼少時からフランス風の機能和声的な音感を身に付け、「ソナタ」と題された作品でデビューした三善であるが、帰国後の彼は次第に西欧音楽の「自然な和声感」や「ソナタ形式」に代表される体系に対する違和感を吐露するようになっていく。

交響三章――成立前史

そんな最中に日本フィル・シリーズの第4作として委嘱され1960年に作曲、渡邉暁雄指揮の日本フィルにより初演されたのが、本日演奏する「交響三章」である。外見的には「交響曲」と名付けても差し支えない多楽章からなる管弦楽曲であるが、敢えてそれを回避した背景には、同じ日本フィル・シリーズ第1作として先に世に出ていた矢代秋雄の「交響曲」の強烈な存在感（三善はその初演に際し公演プログラムに一文を寄せている）に加え、上述のような「西欧音楽のシステムへの違和感」があったものと思われる。自身の回顧によると、日本的なロマンティシズムの追求を念頭に作曲は進められたが作業は極度に難航、当初春シーズンでの初演が予定されていたが期日までに完成に至らず、実際の初演は10月にずれ込むこととなった。

その理由の一端は、バラバラに生じた個々の楽想を一つの

作品という持続の中に組み込むことの難しさから生じていたという。実際、この作品は単一の原理に基づく、というよりは、相互に緩やかなかかわりがある複数の「動機群」＝「その時々の心象の、そのままのスケッチ」としての「音の連なり」（後に自著「彼方より無へ」で指摘したところでは7つ）の様々な組み合わせから生じているが、全曲の核となるそれ（全曲の冒頭でチェロのソロとヴィオラによって提示されて第1楽章を貫き、第2楽章の主要主題を導き、第3楽章の終結部で再現される）も、フランク式の循環主題のような確固たる存在感を示しているわけではなく、それら動機群で徹底した労作が行われているという印象も薄い。にもかかわらず、と言うより、だからこそ、結果生まれた音楽は他に類を見ない三善独自のものとなったとも言え、その孤高とも言えるスタイルが逆に多くの追従者を生むなど、当時の音楽界にも多大な影響を与えた。その影響力の大きさは、作曲家吉松隆氏が回想するように、当時の作曲コンクールに提出された多くがこの「交響三章」や「管弦楽のための協奏曲」（1964）のような三善風の作品で占められていた、といったエピソードからもうかがえる。

なお、この段階では極めてストレートでクリアな響きが特徴的であった三善の音楽は、時代を下るにしたがい次第に複雑さの度合いを増し、1970年代以降、それぞれが精緻に書き込まれた複数の独立した声部がお互いを無視するがごとく絡み合うことで生じる混沌とした響きで満たされるようになっていく。

交響三章 —— 作品について

1960年という成立年代から明らかなように、この曲には古典的な意味での調性は存在しないが、「ロ音（h）」が全曲の中心音として設定されている。

第1楽章は全編にわたってゆったりとしたテンポで奏でられる前奏曲。「A-B-A'」と大きく3つの部分から成り、静寂の中で始まり再び静寂に戻っていく。A（およびA'）の部分は主に弦楽器、木管楽器、金属打楽器などで奏でられ、先述の主要主題の他、フルートが奏するメロディアスな10音動機が現れる。中間部に当たるBの部分には金管楽器も加わってクライマックスを築く。B部分の開始に置かれる霧が湧き上がるような上向音型が連想させるように（「管弦楽のための協奏曲」第3楽章“エレジー”）、バルトーク的な「夜の音楽」の気配を濃厚に漂わせている。

第2楽章は全編が変拍子で進行する急速なスケルツォ。8分の5拍子で開始され、その後頻繁に変わる拍子に規則性はほとんど存在しないと言っても過言ではなく、演奏は至難を極める。また、分かり易い形式らしい形式を持たず、「楽章冒頭に現れる2つの主題（「主要主題に基づく上昇を繰り返す音型」と「ドアをノックするような音型から始まり2声部が絡み合うように進行するメロディ」）が姿を変えながら時たま回帰する」という至極単純な事実以上に妥当性の高い分析をすることも難しい。が、この楽章の真価は独特の疾走感と煌びやかな音色の乱舞とにこそあり、初演当時、特に強いインパクトを与えたという。

第3楽章は変奏曲。冒頭にフルートで提示される3度音程の連鎖が変奏の主要主題であり、それに影のように寄り添うファゴットの上向音型なども副次的な役割を持つ。最初の変奏は第1楽章冒頭に通じる静謐な雰囲気の中で行われる。第1楽章で提示されていた10音動機がピアノに現れるところからが第2変奏で、管楽器がカノン風に主要主題を扱って最初のクライマックスを築く。第3変奏は8分の5拍子の一定のビート上で展開し、三連符による強烈な同音連打に乗って第2のクライマックスが訪れる。第4変奏は弦楽器の柔和なコラールと硬質な音色の楽器群によるオブリガートの交替で、第5変奏は押し出しの強い歌謡的な主題と点描的な音楽との組み合わせで、それぞれ進行し、低音から始まる管楽器のストレッタを経たきわめて急速な8分の6拍子による第6変奏で第3のクライマックスに至る。不規則な変拍子による第7変奏の狂乱の舞の頂点で全曲冒頭の主要主題が全オーケストラで鳴り響くと、そこから音楽は急速に静まってゆき、ソロ・ヴァイオリンが主要主題で全曲を回想しつつ、三たび静寂へと還っていく。この楽章については特に第4変奏以降にデュティユ（交響曲第1番など）からの色濃い影響が聴き取れる。

なお、この曲は1960年の芸術祭奨励賞、ユネスコのIMC（国際音楽評議会）で第2位を受賞している。

「日本的ロマンティシズム」の余白

さて、ここからは余談である。作曲に当たって三善が設定した「日本的なロマンティシズム」という命題に関して、本人は言明していないが、世阿弥が雅楽用語から引いて一般化した「序破急」の構成が念頭にあったのではないか、という仮説を唱えてみたい。ゆったりとした導入（序）、第2変奏以降の拍節感の導入（破）、第6変奏以降更に加速してクライマックスを迎える（急）という3つの段階から構成された第3楽章はまさに教科書通りの三段構成である（実際はコーダで「序」が回帰するが）。更に妄想を広げるなら、楽曲全体も第1楽章（序）、第2楽章（破）、第3楽章（急）の三段構成になっていると強弁できなくもない。さすがにこれはこじつけが過ぎるとしても、テンポの速い音楽が極端に少ない日本の「現代音楽」にあって、これほどまでに充実した「アレグロ」、「プレスト」の音楽を書く能力は、作曲家三善晃にとって大変なアドバンテージであった、ということだけは間違いないように思われる。

そして。テンポの速い音楽に適性を持ち、「（日本的）ロマンティシズム」を、より文字通りに追求した作曲家として、私たちは次回、吉松隆氏の作品をご紹介する予定である。背景も作風も極めて対照的な二人の作曲家に、それでも共通する何かがあるのか、次回の演奏会で改めて問いかけてみたいと思う。

（櫻井 統）

PROGRAM NOTES 2

マヌエル・デ・ファリャ
バレエ「三角帽子」より

Manuel de Falla (*1876-1946*)

今回の「３」にちなんだ曲目によるプログラムの２曲目は、「三角帽子」です。

「三角帽子」を作曲したマヌエル・デ・ファリャは、1876年に、南スペイン、アンダルシア地方のカディスに生まれました。彼は、1919年、42歳のときにこの曲を作曲しました。来年がちょうど100年目の記念の年ですね。私たち水星交響楽団が定期演奏会でファリャを取り上げるのは、2009年の第42回定期演奏会で演奏した「恋は魔術師」以来、2回目になります。

このバレエ音楽は、彼の出世作となった、その「恋は魔術師」(1915年)の成功がきっかけとなって、バレエ・リュス(ロシア・バレエ団)の主宰者セルゲイ・ディアギレフの依頼で作曲されました。ロンドンで行われた初演は大成功を収め、ファリャの名声は不動のものとなりました。

このバレエの振り付けは、通常のクラシックバレエと異なりフラメンコをはじめとするスペインの民族舞踊が取り入れられており、踊り手はトウシューズを履かず、手拍子、足踏み、カスタネットを叩いたりしながら踊ります。20世紀を代表する振付家のひとり、レオニード・マシーンが振り付けを担当し、この「三角帽子」の振り付けは彼の最高傑作とされています。彼は、1917年にコクトー、ピカソ、サティの共作による画期的な作品「パラード」の振り付けを担当して大きな話題となり、この「三角帽子」はその２年後の作品になります。モスクワ生まれの彼は、作品に本物のスペインの踊りを取り入れたいと思い、ディアギレフとともに、ファリャの案内でグラナダを訪れ、ロマ(ジプシー)の踊り手からフラメンコやその他の民族舞踊を習得しました。大変な苦労をしましたが、それが実を結び、自らも踊り手(主人公の１人である粉屋の主人)となった初演は前述の通り大好評となりました。

そして「パラード」と同じくこの「三角帽子」も、スペイン生まれのピカソが衣装と舞台装置を担当しています。

ファリャの生まれ故郷であるアンダルシア地方は、フラメンコ発祥の地です。フラメンコは、アンダルシアの土地、自然に加え、そこに次々と移り住んだ様々な民族、古代ローマ人、北ヨーロッパ人、ユダヤ人、イスラム、そしてロマ(ジプシー)…によって育まれました。西洋でも東洋でもない、独特なリズムと歌。そして踊り。

ファリャは、この「三角帽子」の音楽に、フラメンコに関係の深い、「ファンダンゴ」「ファルーカ」「ホタ」や「セギディーリア」といったスペインの民族舞踊の音楽を散りばめ、メゾソプラノによる「歌」も取り入れています。アンダルシア生まれ、生粋のスペイン人であるファリャの「三角帽子」、そこからは本物の「スペイン」が体感できる、はずです. . . 。

セギディーリャ

ホタ

代官

このバレエは、19世紀スペインの名高い作家ペドロ・アントニオ・デ・アラルコンが民話に基づいて書いた小説をもとにしており、好色な代官が権力をかさに着て、美しい粉屋の女房をものにしようとするが、反対にさんざんな目に遭わされるという物語です。「三角帽子」とは、角の３つある帽子で、代官のかぶる、権力の象徴となっている帽子のことです。アンダルシア地方の「ある町」の、水車小屋のある粉屋が舞台となっています。

このバレエ音楽には２つの演奏会用組曲がありますが、本日演奏するのは当団オリジナルの抜粋版です。曲は続けて演奏されます。

第１幕／町外れの粉屋の水車小屋

１．序奏～昼下がり

トランペット、ホルンと太鼓によるファンファーレの後、カスタネットと「オレー！」の掛声、そして手拍子。メゾソプラノによる前口上「若い嫁よ、扉にはかんぬきを下ろしなさい！悪魔が起きてくるぞ！」が聞こえ、再びファンファーレ。ヴァイオリンとクラリネット、コールアングレによる「昼下がりのテーマ」が流れるとバレエの幕が上がります。アンダルシア地方のある町に、容姿には優れないが働き者の粉屋と、美しい妻が住んでいます。２人が飼っていた鳥は、粉屋の言うことは聞かないが、妻の前では言う通りに美しくさえずります。「うまいぞ」とばかりに女房をほめる主人。仲の良い２人の踊り。

２．粉屋の女房の踊り（ファンダンゴ）

そんなある日、この美しい女房を見初めた代官が、こっそりお忍びで彼女を口説きにやって来ます。彼女はこれを知ってか知らずか、陽気に「ファンダンゴ」を踊ります。いかにも「スペイン！」という感じの情熱的な踊り。バレエでは女性ダンサーにとって１番の見せ場になります。

３．葡萄の房

これを見ていた代官はたまらなくなり、よたよたと女房の前に姿を現します（全編にわたり、代官の様子はファゴットによるユーモラスな旋律によってあらわされます）。音楽は軽快なテンポとなり、女房は葡萄の房を持ち、「こっちにおいで！」とばかりに代官の前にちらつかせて（まるで闘牛士のように）、代官をからかいます。すっかり目の回った代官は、その場に倒れ込んでしまいます。そこへ粉屋の主人が出てきて、埃を払ってあげるふりをしながら体を叩くので、代官はすごすごと帰って行きます。「このままでは済まないぞ！」ここでメゾソプラノによる短い歌が入ります。

第２幕／夜、粉屋の家

４．隣人たちの踊り（セギディーリャ）

その日の夜はサンファンの祭り(聖ヨハネ祭・夏至の火祭り)。粉屋の家には仲間達が集まり、賑やかに「セギディーリャ」を踊っています。落ち着いたテンポの、３拍子の音楽。そして女房は主人に、得意な踊りを踊らないかと促します。

５．粉屋の踊り（ファルーカ）～カッコウの歌

主人は承知して、フラメンコの舞曲ファルーカを踊ります。男性ダンサーの１番の見せ場です。ホルンとコールアングレによる情熱的で神秘的な旋律、弦楽器によるギターのようなリズム。熱狂的な盛り上がりの中で踊りが終わり、皆が主人を讃えながら祝杯を挙げていると、突然ノックの音が響きます（ベートーヴェンの「運命」のテーマ）。警官たちが現れ、粉屋の主人は逮捕されてしまいます。これは代官の悪だくみで、粉屋は無実の罪で捕えられたのです。仲間達が帰り、一人取り残された粉屋の女房は、悲しみに暮れ泣いています(メゾソプラノの「夜中にカッコウが鳴く」の歌)。女房は楽しかった先程の集まり（クラリネットによるセギディーリャの旋律）を思い出していると、時計が９時を打ちます。

６．代官の踊り

するとそこへ今度こそ妻を口説き落とそうと、代官がやってきて、優雅に１曲踊ります。カスタネットを伴ったゆったりした音楽。踊り終えた代官は、粉屋の家に近づこうとしますが、水車小屋の前の小川にうっかり落ちてしまいます（突然の大音響）。それを見つけた女房は、プンプン怒りながらもさすがに見かねて手を貸そうとしますが、かえって代官に迫られると、鉄砲を突きつけ、彼が驚く間に逃げ去ります。びしょ濡れの代官は帽子と上着を脱ぎ、すっかり疲れてそのまま粉屋のベッドで寝てしまいます。

７．終幕の踊り（ホタ）

そこへ女房と入れ違いに、牢屋から脱走してきた粉屋の主人が戻ってきて、脱ぎ捨てられた代官の服を見るなり、妻が寝取られたと勘違いし、今度は復讐するために代官夫人の所へ向かいます。ここから話はドタバタ喜劇のような展開となり、脱走した粉屋を追ってきた警官に、粉屋の服を着ていた代官は粉屋と間違えられ、散々殴られた揚句に捕まってしまいます。近所の仲間達は普段から威張り散らしていた代官に仕返しができたと、粉屋の夫婦と共に喜び、「ホタ」を一晩中踊り明かします。（幕）

（高橋 淳）

PROGRAM NOTES 3

カミーユ・サン＝サーンス
交響曲第3番「オルガン付き」

Camille Saint-Saëns (*1835-1921*)

はじめに：水響とサン＝サーンス

「3」プログラムのトリを飾るのは、サン＝サーンスの交響曲第3番「オルガン付き」です。「さん」がたくさんついた、締めにふさわしいタイトルですね。

30年以上の歴史を持つ水響ですが、ラヴェルを筆頭にフランス人作品を数多く取り上げているにもかかわらず、実はサン＝サーンスの楽曲を演奏会で取り上げるのは今回が初めてです（筆者調べ。ちなみに団員の多くが学生時代に所属した一橋大学管弦楽団では、「オルガン付き」や「死の舞踏」を複数回演奏しています。）。

水響の選曲でも長らく候補曲となってきながら、これまで縁のなかったサン＝サーンス。

そんな水響初挑戦の作曲家、サン＝サーンスとはどのような人物なのか、触れていきたいと思います。

サン＝サーンスについて

サン＝サーンスは、官吏の息子としてパリで生まれました。しかし、生後間もなく父親が結核で亡くなってしまいます。以後、サン＝サーンスは母親とピアニストであった叔母により育てられ、その天賦の才を開花させていきます。

2歳で叔母からピアノの手ほどきを受けると、3歳でピアノ曲を作曲したサン＝サーンスですが、ピアノに限らず家庭教師による指導の連続で通学することはなく、同世代の友人と遊ぶこともなく、外界との触れ合いを遮断された子どもらしさのかけらもない幼少時代を送ることとなります。また、神童であるゆえに「モーツァルトの再来だ！」といったようにしばしば褒め讃えられることが多かった中、母親は「お世辞を鵜呑みにしないように」と、厳しくしつけていたようです。そんな幼少期だったからか、成人してからのサン＝サーンスはとても気難しい人物となったようです。

7歳で高名なピアノ教師であったカミーユ・スタマティのもとで本格的な指導を受け、演奏技術の根幹をたたきこまれると、13歳でパリ音楽院へ入学。フランソワ・ブノワのもとでオルガンの指導を受けるとともに、18歳で最初の交響曲を作曲して作曲家としての才能も発揮していくこととなります。

パリ音楽院を卒業したサン＝サーンスは1853年からサン・メリー教会のオルガニストとして研鑽を積むと、1857年にはパリのオルガニストとしては最高峰にあたるマドレーヌ寺院のオルガニストに任命され、約20年にわたって奏者を務めあげます。サン＝サーンスのオルガン演奏を聴くために、フランス内外から音楽家が集まったといわれ、その演奏はサン＝サーンスが大いに影響を受けたフランツ・リストからも絶賛されたそうです。また、1861年からの4年間、ニデルメイエール音楽学校で生涯唯一の音楽教師を務め、このときの生徒であるガブリエル・フォーレとは生涯の友人となります。

オルガニストを務めたマドレーヌ寺院。
ナポレオンの指示で古代神殿風のネオ・クラシック様式で建造され、教会へ転用。
一見、教会には見えないですよね…

一方、サン＝サーンス自身は演奏家としても作曲家としても、長い期間フランス国内では冷遇されていました。明確でリズムのしっかりした演奏は「素朴さがない」、自作のピアノ曲は「風変わり」なものとして評価され、レパートリーとしていたベートーヴェンやシューマンの作品は、大衆が求めているのははやりのオペラであるようなパリではほとんど知られていない状況。歴史的には第二共和政から第二帝政を経て第三共和政へと政治形態が大きく変わっていく時期（日本は江戸末期から明治に入るくらい）であり、大衆の流行に反する古典的な作品を演奏するサン＝サーンスはむしろ、「前衛的」なものであり、受け入れられずにいたのです。そんな状況下でも、サン＝サーンスはヴァイオリンの名手、サラサーテのために「序奏とロンド・カプリチオーソ」を作曲したり、オペラ「サムソンとデリラ」の構想を練るなど、淡々と作曲活動を続けていましたが、普仏戦争が勃発。サン＝サーンスも国民軍の兵卒として従軍したこの戦争での大敗ののち、フランス音楽界にもようやく国民意識が目覚め始めます。

とはいえ、相変わらず劇場用音楽ではない純粋な器楽曲は演奏できる機会はなく、せっかく書いたオペラであってもサン＝サーンスのように劇場側の先入観から演奏機会を得ることのなかった作曲家は自ら演奏会を開催するしか作品を発表する方法がない状況でした。そんな状況を解消すべく、フランス人作曲

家の作品を演奏する目的で1871年に国民音楽協会が設立されます。サン＝サーンスも中心メンバーとして設立に貢献し、自作曲では交響詩「オンファールの糸車」などを初演しています。

この時期には、マドレーヌ寺院のオルガニストを後進に譲る、結婚して2児を設けるも幼くして2人とも亡くす、妻を旅先で置き去りにして母親のもとへ帰った挙句事実上の離婚を突き付ける、そんな母を肺炎で亡くすと、パリから失踪して「サン＝サーンス死亡説」が流れるなど、生活上の大きな変化がありました。しかし、依然変わらずに作曲を続け、オペラ「サムソンとデリラ」、組曲「動物の謝肉祭」、交響曲第3番「オルガン付き」といった、現在でも多く演奏される作品を生み出し、19世紀末にかけて遅咲きながらフランス音楽界の大家としての地位を築いていきます。しかし、高い評価も称賛の声も長くは続きません。

20世紀に入ると、一方ではドビュッシーら新しい潮流から反動的、前時代的といった評価を受けたり、他方ではワーグナーの音楽が政治的に利用されていることへの批判によりフランス国内のワグネリアンから誹謗中傷を送られたりと、多方面からアンチ・サン＝サーンスの攻撃を受けることとなります。

そういった批判の声に影響されることなくサン＝サーンスは作曲や演奏を行い、旅行先のアルジェリアで86年の生涯を閉じます。生前の功績をたたえ、サン＝サーンスの遺骸はフランス国内へ運ばれ、葬儀はマドレーヌ寺院にて国葬で執り行われました。

練習中、合奏トレーナーのO先生から「サン＝サーンスと伊藤博文そっくり説」の提唱がありました。確かに似ている…？

オルガン付きについて

そんなサン＝サーンスの作品の中でも、交響曲第3番「オルガン付き」は最も有名かつプロ・アマ問わずに演奏機会の多い作品の一つです。

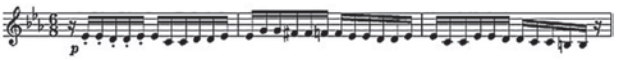
ロンドン・フィルハーモニック協会の委嘱により作曲され、初演は1886年5月19日、ロンドンのセント・ジェームズ・ホールにて、サン＝サーンス自身の指揮とロンドン・フィルハーモニー協会管弦楽団の演奏により大成功をおさめます。フランスでの初演は翌年、ジュール・ガルサン指揮、パリ音楽院演奏協会のコンサートで行われ、こちらも大成功をおさめ、サン＝サーンスは「フランスのベートーヴェン」という最大限の称賛を受けます。

二部構成というこれまでになかった構造（実質的には前後半に分かれていて4楽章のようなものですが）、3管編成に加えて「オルガン付き」の名のとおりパイプオルガン、そしてピアノを要する編成と、従来の交響曲とは一線を画すものであり、革新的な作品だったのは間違いないでしょう。
前述のとおり、フランスでは交響曲というジャンルが長く冷遇されてきた中で、若いころから交響曲を書いてきたフランスの交響曲業界におけるパイオニアであるサン＝サーンスにとってふさわしい称賛だと思いますが、「この作品に自分の与えることのできるもののすべてを注ぎ込んだ」として、「オルガン付き」以降、交響曲は作曲していません。

第1楽章
第1部：Adagio～Allegro moderato

弦楽器の下降音形と木管楽器の上昇音形による短くも物悲しい序奏部ののち、弦楽器によって第1主題が刻まれます。この主題は全編を通じて、形を変えて登場します（循環主題）。また、グレゴリオ聖歌のディエス・イレ（怒りの日）と同じ音形になっており、曲の始まりに暗く不穏な印象を与えています。

【第1主題】



この音形が裏拍から始まっていることにより、表拍から始まる場合よりもリズムが意識的に刻まれ、結果的に緊迫感が出ているのではないかと思います。かっこいい、と個人的に思っているポイントです。

この第1主題が木管楽器によって展開されてオーケストラ全体による盛り上がりを迎えたのち、木管楽器による第1主題の短い変奏を経て、幅広で美しい第2主題が演奏されます。

【第2主題】

のびのびと歌いたくなるような旋律ですが、その裏では16分音符による細やかな伴奏が演奏されています。サン＝サーンスの緻密な構成が垣間見えます。

この第2主題ののち、第1主題の変奏による展開部を経て再現部に入り、冒頭の第1主題が今度はタイでつながった形で演奏され（かっこいい）、前半最大の盛り上がりを見せたのち、第2主題がだんだんと収束していき、序奏部の上昇音形と下降音形によって後半へと続きます。

第1楽章
第2部：Poco adagio

ここでようやくオルガン登場です（オルガンは各楽章後半のみ）。変ニ長調のオルガンの和音の上に穏やかで息の長い旋律がヴァイオリン・ヴィオラ・チェロによって、続いてクラリネット・ホルン・トロンボーンによって演奏されます。

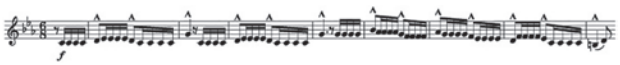
【とても美しいパイプオルガンによるAdagioの主題】

オルガンの伴奏に乗ってこんな美しいメロディを奏でられては、もうひとたまりもありません。ヨーロッパの街の中心にある石造りの教会からパイプオルガンの伴奏に乗って讃美歌が聞こえてくるような印象を受けます（実際にはコンサートホールでの演奏を念頭に書かれた曲ですが）。仕事帰りで疲れているときなどに聴くと非常に効果的です。第1楽章の後半はこのAdagioの主題の変奏ののち、第1主題の変奏とオルガンの不協和音が現れて不穏な空気を漂わせるが、再度Adagioの主題に戻り、最終的にはオルガンによる変ニ長調の和音によって解決して幕を閉じます。

第2楽章
第1部：Allegro moderato～Presto～Allegro moderato～Presto

第2楽章第1部のスケルツォは、直前の穏やかな解決から打って変わって、力強い旋律から始まります。

【第2楽章主部の主題「タタタタタン」】

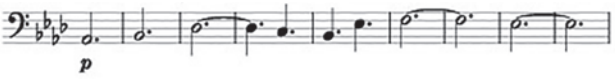


第1楽章で出てきた第1主題と同じく、この「タタタタタン」も表拍から始まらないことでフレーズに鋭さが出ています。この主題は、最初はヴァイオリンとヴィオラにより、次はチェロとオーボエ、クラリネットにより演奏されますが、付点四分音符の部分にはこのフレーズに呼応するように「タタタタタン」のリズムが最初はティンパニにより、次はヴァイオリンとヴィオラ、コントラバスにより演奏されており、曲に推進力を与えています。

木管楽器による第1主題の変奏とこの主題が交互に演奏されたのち、曲はPrestoのトリオに入ります。

全編を通して、どちらかといえば暗いまたは重厚な曲想だったのが、軽快な木管の旋律とピアノの上昇音形により、ここで初めて曲想に「明るい」変化が現れます。この軽快な旋律が調を変えて展開したのち、フィナーレ（第2楽章 第2部）で登場する主題のもとになる幅広な旋律が現れます。こちらも調を変えながら展開しますが、突如短調の下降音形で駆け下りると、主部の「タタタタタン」が再現され、再度のトリオと続き、金管のコラールによって高揚感が高められていきます。

【とてもかっこいい金管のコラール】



再度下降音形で下った先で弦楽器が金管のコラールの旋律をフーガ形式で奏でると、最後に第1主題が垣間見えたのちにト長調の和音で解決し、いよいよ感動のフィナーレへ向かいます。

第2楽章
第2部：Maestoso～Allegro

パイプオルガンのハ長調の和音が荘厳に鳴り響き、第1部の終わりのコラールがハ長調で演奏されるとそこはもう別世界です。第1主題はハ長調に転調されて登場し、冒頭の暗く不穏な様相はもはやありません。弦楽器が幻想的な4手ピアノとともにハ長調となった第1主題を和音で奏でると、パイプオルガンとオーケストラ全体がそれを繰り返し、さらにはフーガ形式に展開されていきます。

ここから先は、主に木管楽器により演奏される「田園風」の旋律と、第1主題の変奏(あるときはフーガ形式、あるときはコラール、またあるときはヴァイオリンの激しい刻み)により展開され、最後は金管のファンファーレ、ティンパニのソロののち、全オーケストラによるハ長調の和音に包まれて劇的な幕引きとなります。

フィナーレでは曲が進むにしたがって、フレーズの区切りが長くなっていく点も魅力だと思います（4分の6・4分の9で2小節単位⇒2分の2で3小節単位⇒1分の3で2小節単位）。ぜひ、どんどん息が長くなっていく旋律をお楽しみください。

終わりに：私とオルガン付き

プログラム執筆にあたってサン＝サーンスに関する文献を読む中で、当時のサン＝サーンスに対する批判としてよく出てきた表現が「代数のような音楽」というものでした。おそらく、サン＝サーンスの作品を聴いたときに「様式美」のようなきちんとした構成が、当時は堅苦しく親しみにくい作品だという印象（さらには先入観）を与えていたのでしょう。若いころは前衛的だ、晩年は前時代的だと時代ごとに様々な批判を受け、それでも生涯ぶれずに自分の作曲スタイルを曲げなかった姿勢は、もっと評価されていいのではないでしょうか。短いスパンで臨機応変に対応できることが求められがちな現代人にとって、自分が良いと思ったものを貫き通す信念はふとしたときに顧みるべきことだと思います。

今回、晴れて水響初の「オルガン付き」演奏に参加することができましたが、私個人としてはこの曲は大学1年生で初めて聞いて以来、10年来の憧れの曲でした。今回の演奏会までの間、サン＝サーンスの作品では交響詩「死の舞踏」と「サムソンとデリラ」のバッカナールを演奏したことがあり、大変感銘を受けてきましたが、やはり「オルガン付き」は別格でかっこいい！

ありがとう、サン＝サーンス！ありがとう、水響！！

（鈴木 海里）

次回演奏会

2019
5/19（日）
13:30 開演
（13:00 開場）
すみだ トリフォニーホール 大ホール
全席自由
¥1,500

水星交響楽団 第 59 回定期演奏会

新田 ユリ（指揮）

◇シベリウス　交響曲第６番 ニ短調
◇吉松 隆　交響曲第６番「鳥と天使たち」
◇チャイコフスキー　交響曲第６番 ロ短調「悲愴」

チケット　https://t.pia.jp　P コード：132-946

2019
11/4（月・祝）
すみだ トリフォニーホール 大ホール

水星交響楽団 第 60 回定期演奏会

齊藤 栄一（指揮）

◇マーラー　交響曲第 8 番 変ホ長調「千人の交響曲」

※詳細につきましては、追って発表いたします。

問い合わせ　info@suikyo.jp / 090-1608-5749（植松）　水星交響楽団 HP　http://www.suikyo.jp

2018
12/21（金）
19:00 開演
（18:20 開場）
みなとみらホール 大ホール
全席指定
S 席 ¥1,000
A 席 ¥500

一橋大学管弦楽団 第 66 回定期演奏会

森口 真司（指揮）

◇グラズノフ　演奏会用ワルツ第１番
◇R・シュトラウス　組曲「薔薇の騎士」
◇ツェムリンスキー　交響詩「人魚姫」

一橋大学管弦楽団 HP　http://jfn.josuikai.net/circles/orchestra/
チケット　https://t.pia.jp　P コード：131-666
問い合わせ　info.hit.concert@gmail.com（広報：加藤）

水星交響楽団　第58回定期演奏会 出演者

◆常任指揮者
齊藤 栄一

◆コンサートミストレス
亀井 亮子

◆ファーストヴァイオリン
伊東 陽子
遠藤 颯
織井 奈津乃
片岡 拓巳
加藤 峻一
亀井 亮子　◎
國宗 洋子
櫻田 雅信
滝澤 蘭
田村 奈津子
徳地 伸保
中谷 華子
西沢 洋
前澤 郁弥
宮川 雅裕
米嶋 龍昌

◆セカンドヴァイオリン
荒木 穂香
石川 貴隆
大西 彩加
大西 一恵
川原 ひかり
黒川 夏実
後藤 美歌
高橋 佑希
土屋 和隆
永井 翠
藤井 瑠夏
前田 啓
森 勇人　◎

◆ヴィオラ
秋枝 美咲
落合 純一
川俣 英男
木村 納
古宇田 凱　◎
小別當 アキヨ
鈴木 尚志
戸田 彩織
水上 久美
山口 実
山崎 未来

◆チェロ
東 杏子
荒井 理絵
金田 千畝
北岡 正英
首藤 ひかり
鈴木 皇太郎　◎
橘 温子
中山 佐知子
中山 憲一
日吉 実緒
能岡 雅人

◆コントラバス
阿部 洋介
石附 鈴之介　◎
大西 功
刈田 淳司
田中 文彬
野村 美里
増渕 悠太
山六 真由

◆フルート
門脇 文子
神山 真美
住岡 由梨奈
中澤 高師
本田 洋二　◎

◆オーボエ
菅野 勇斗
齋藤 暁彦　◎
寺田 吉太郎
野口 秀樹
平林 香緒

◆クラリネット
市村 広奈
清水 樹土
藤原 誠明　◎
前中 悠輔
山岸 雄作
横地 篤志

◆ファゴット
小田中 優介
金谷 蔵人
冨井 一夫　◎
福島 知浩

◆ホルン
伊集院 正宗
大高 直哉
岡本 真哉
島 啓　◎
山崎 智哉
山城 晴香

◆トランペット
淺田 健二
家田 恭介
岩瀬 世彦　◎
金子 恭江
神山 優美

◆トロンボーン
石井 志歩
小林 威之
櫻井 統
佐藤 幸宏　◎

◆テューバ
植松 隆治

◆パーカッション
石川 誠
上田 祥太朗
岸 敦子
鈴木 海里
高橋 淳
塚田 桃子
椿 康太郎　◎
山本 勲

◆ハープ
東森 真紀子

◆ピアノ・チェレスタ
田頭 英子
山形 リサ

◎＝パートトップ

今回お世話になったトレーナーの皆さま

長田 雅人
林 憲秀
古野 淳
三橋 敦
柳澤 崇史
山田 裕治

水星交響楽団運営委員会

運営委員長：植松 隆治
コンサートミストレス：亀井 亮子
弦インスペクター：川俣 英男、刈田 淳司
木管インスペクター：横地 篤志
金管インスペクター：佐藤 幸宏
打楽器インスペクター：山本 勲
総務：伊東 陽子
会計：金子 恭江、黒川 夏実
楽譜：伊集院 正宗、野口 秀樹、宮川 雅裕
運搬：刈田 淳司
会場：横地 篤志
広報・受付：岡本 真哉、鈴木 海里
鈴木 牧、土屋 和隆、東海林 拓人
レセプション：織井 奈津乃、永井 翠
インシュペクター：椿 康太郎、永井 翠
チラシ・プログラムデザイン：水本 紗恵子